

■随想

# アカシヤの大連の思い出

櫻井勝司（高18回）

中国遼寧省大連の大連外国語学院（当時の名称。今は大学）に赴任してからも二十余年たってしまった。あのころ中国は貧しく暗かった。日本から送る古着や古本が喜ばれた時代である。その後、中国は激変した。

## 中国派遣

一九九一年三月から九三年七月まで、日中友好条約に基づき、神奈川県教育委員会から派遣されて（長期出張）、中国政府の国家外国専門家局の専門家（専門家）として招聘され、大連外国語学院で日本語の授業を担当した。

大連は、遼東半島の先端に近く渤海に突き出た町で、三方を海に囲まれている。戦前は満鉄社員ほか多くの日本人が暮らしていた。ロータリー式の中山広場から南山（ジョンシンヤングラウンデーション、ナシヤン）麓にかけて多くの日本風家屋があったが、私が着任したころには取り壊されていて、壁がなくなった六畳間や四



●さくらい・しょうじ  
飯田市東中央通出身。追手町小学校、東中学校、東京教育大学文学部漢文学専攻科卒。同人誌「橋」に参加。神奈川県立高校教諭。定年後は生涯学習講座の講師。著書に短編小説集「河童」、評論「作家論集」。

畳半の和室が外から見えたものだ。

大連外語は南山麓にあり、港が近いので部屋から汽笛の音がよく聞こえた。南山麓はロシア風の一軒家が多く今は風致地区になっているが、このあたりは散歩すると心安らぐ界限であった。南山に登ると町と港が見事に一望できた。大連外語のすぐそばに東本願寺があり、満鉄本社だったビル、ヤマトホテル（現大連賓館）、横浜正金銀行（人民銀行）など歴史的建造物が多くあった。

## 大連外国語学院

大連外語は中山区南山路にあり、私の所属は日本語学部でなく培訓部であった。それは先進の科学技術を習得させるために各地の大学の助教授クラスを集めて日本に留学させるのだが、その準備として大連外語で留学直前の日本語の学習をする半年間の特訓部である。学部の日



大連賓館（ヤマトホテル）

生たちと違って、勤務地に帰れば学生に教える立場の研究者で、年齢も三十から四十歳くらいの家庭持ち、一人っ子政策で全員子供は一人、北京・重慶・西安など中国各地から単身赴任で来て、学内の寮で四人一部屋の集団生活をして

ていた。日本の学生ならすぐ逃げ出すだろうと思った。私は四十五歳だったから年齢差が少ないし単身赴任同士で友人のような関係になったが、彼らは儒教的な生活態度の持ち主で礼儀正しかった。もちろん授業は真剣で、日本の無気力な高校生を教えるよりずっと楽しかった。主に「日常会話」を担当したが、別に公開講座も担当した。持ち時間は午前中二時間の授業だけで、面倒な職員会議などは一切なく、実に気楽だった。夜は学生が部屋に来たり、私が学生寮に行ったりして、会話の実習をした。

## 学生たち

八九年六月四日、市民の民主化要求デモを軍が鎮圧、多数の死者を出した天安門事件によって、アメリカが留学生の受け入れを中止したため、アメリカに留学する予定だった研究者たちが、急きよ日本に留学することになった。半年を一期として五期が私の任期だったが、第一期生がそういう人たちだった。

「私たちはアメリカに行く予定だったので」と残念がって言うのを何度も聞いたものだ。彼らは文化大革命の苦しみを経験していた世代である。被害者数億人、死者数千万人という文化大革命が終わって改革開放路線に転換してから、まだ十四年しか経っていなかった。彼らの幼年期には、文革以前にも国民党との戦闘、大躍進政策の失敗、反右派闘争と混乱が続き、餓死者が町にあふれたといわれている時代である。

学生は知識人家庭の出身だから文革中は被害者であつたはず。授業中はその話題は出せないの、学生寮や私の部屋で文革当時の話を聞いた。親や親族が酷い目にあつたり、家の大事な書画を破壊されたりした話を随分聞いた。上山下郷（シヤンサンゲンゲン）（下放とも言う）時の辛い体験を思い出して泣き出す人もいた。中学高校のころに都市から貧

しい農村に送られ辛い青春を過ごしたのである。

ある朝まだ暗いころ、窓からグラウンドが見えるのだが、少なからぬ学生がグラウンドにいる。何をしているのかこの寒いのにと思っていると、教科書を読みながら歩き回っていたのだ。なぜそんなことをと尋ねると、寮では一人になれないし他にすることもないんです、という。会話力の上達も早かった。

「私たちの給料は運転手より安いんです」とこぼした。医者で日本の国立大学の医学部に研修に行くという学生が多かった。「永いこと勉強しなければ医者になれないのに、不公平ではないですか」という。共産党の分配は厳しく、教師や医師の給料は驚くほど安かった。しかし彼らは質実で忍耐強く、明るかった。

## 専家楼

日本語のほかに英・仏・露・独語学部があつて、外国人教師は専家楼と呼ばれる五階建ての建物に集まって住んでいた。部屋はホール、リビング、寝室、キッチン、バス・トイレと、家族向きのゆつたりとした広さで、家賃と水道光熱費は無料だった。私の給料は月二千元ほどで、中国人教授の四〜五倍。当時は年収が一万元を超えると万元戸と呼ばれ、金持ちだったから、住居費なしで

年収二万四千元は結構な金持ちといえた（現在、中国人教授の月給は一万元、日本人教師は五千元と逆転している）。物価が驚くほど安いので生活には困らないはずだが、実は大変不自由だった。欲しい商品が店に並んでいないのだ。国営商店の棚には本当に何もなかった。労働公園の前にあつた大きな自由市場に行くとな鮮な野菜や果物が安く買えたので頻繁に出かけたが、肉や魚は鮮度が非常に悪く、不衛生でとても手を出せなかった。まれに近くの海でとれたのか新鮮なシャコやサヨリが並んだ時は買った。専家楼に食堂はあつたが舌に合わないもので、なるべく自炊するようにした。

テレビは一般家庭に普及していたが、番組は反日・愛国教育番組が多かった。凶悪な顔の日本軍人が中国の女性や農民を襲い、りりしい八路軍（共産党軍）が助けるというワンパターンで、今でも反日宣伝放映をしている。ある学生は「日本人は恐ろしいと思つていましたが、先生に会つて見方が変わりました」と言った。報道機関はすべて共産党の宣伝機関で、一党独裁を支えるためだけのものだ。

しばしば停電し、断水は日常的だった。風呂の湯が出ないのは本当に困った。水不足の上に市内の水道管のあちこちで漏水しているらしかった。乾燥して砂埃りの激



玉光街礼拝堂入り口で

しい国なので、何日も風呂に入れないと辛い。中国人はあまり風呂やシャワーを使わないので困らないらしい。日本人とアメリカ人は特に湯については我慢できない。専家の世話役の外事処にいろんな苦情をよく言った。しかし決して謝罪しないのが中国人なのである。

## 玉光街礼拝堂

あまり知られていない中国の教会について書いておこう。着任してまもなく教会の場所を尋ねて、ジョシマツアンキャン中山広場のそばで大連賓館の裏手にある玉光街礼拝堂に日曜日ごとに通うことにした。大連外語から歩いて二十分ほどである。英国人が煉瓦を英国から運んで建てた礼拝堂だと聞いたが、尖塔のある堂々たる大きな教会堂である。十時

からの礼拝に八百人くらい集まっていた。人があふれている感じだった。それでも入りきらないので、朝八時頃からと二度にわけているのだそうだ。大変な人数である。日本の閑散とした静かな教会と違って、騒々しく熱気があった。よほど辛いことがあったのかオイオイとずっと泣いている人もいたが、取り澄ました日本の教会より切実さを感じられた。相当な人数なのでミサの時は大変である。大きなトレーにかつて見たことのない小指の先ほどの小さなグラスが何百と並べてあり、ワインがほんの数滴入っていた。聖餅はほんのひとかけらであった。あわただしく配られて、いただいて終わりという具合だった。教会は政府の監視下であり、公安も秘かに来ているらしい。地下教会がたくさんあるのだと、来ていた老人から聞いたが、地下教会に行く機会はなかった。毎週、礼拝が終わると、私は重厚な大連賓館や繁華な天津街のレストランに寄って、昼飯を食べた。その料理はうまかった。

## 薄熙来

鄧小平が九二年一月に南巡講話を行い、改革開放を推進し、豊かになれる者は先に豊かになってもよいと号令をかけると、中国はいつきに拝金主義の道突っ走り始めた。文革では徹底的に攻撃され撲滅された「走資派」



91年7月培訓部卒業記念写真

(資本主義の手先)だったが、今や走資派が公認されたのだ。そのころ革命元老の薄一波の息子の薄熙来が親の七光りで大連市長となった。いわゆる太子党である。大連在住の外国人を招待してご馳走し、開放を推進しようとする近くの南山賓館でパーティーが開催された。私も招待されて専門家として紹介され、市長薄熙来氏からビールをついでもらったことが、一つの思い出である。背の高い二枚目だったが、実は彼の評判はかなり悪かった。彼はその後重慶市長になって、一時は中国のトップを狙う勢いだだったが、ご存じの通り逮捕されて終身刑となり、妻の谷開来は英国人殺害の罪で死刑判決をうけた。

中国という国は秦の始皇帝の時代から何も変わっていない気がする。混乱の時代の後に強権的な独裁がきて、それが崩壊して混乱の時代が来る。その繰り返しだが中国の歴史である。共産党の一党独裁もいざれ終わり混乱の時代がくると思う。

## 帰国後

芥川賞作家・清岡卓行の『ア

カシヤの大連』は読んでいたが、作家の甘美な追憶とノスタルジイの書は好きではなかった。しかし大連から帰国してから再読してみると、この作品の感傷がよく理解できた。実は大連には清岡の少年時代ほどアカシヤは残っていない。街路樹はプラタナスか楊柳で、柳絮が雪のように舞うのを初めて見た。労働公園の中には大きなアカシヤの林があった。そこで毎年アカシヤ祭が行われて、日本からの観光客も多い。

九三年七月に帰国して神奈川県立高校で教師を続け、大連で教えた学生たちが東京に留学に来ると、長野県の家を招待して日本の生活を楽しんでもらった。十年ほど前から生涯学習講座の講師を頼まれて、それは今でも続いている。毎年の前期は「近代文学」、後期は「論語」の話をしているが、今の中国に必要なものは儒教四徳「仁・義・礼・智」であると思つづくと思うこのごろである。水も空気も土壌も高濃度に汚染されて、もはや首都北京でさえ「人の生存に適さない場所」だと言われるようになった。改革開放によって目覚めた民衆は格差と一党独裁に怒り、毎年二十万件の暴動が各地で発生している。犯罪・匪賊も多く、中国の学生や友人たちが病気になるまで無事であることを祈るばかりである。